

## 医療情報技師と診療情報管理士の今後

真鍋 史朗<sup>1)</sup> 藤井 歩美<sup>2)</sup> 村田 泰三<sup>2)</sup> 堀島 裕之<sup>2)</sup> 上田 郁奈代<sup>2)</sup>  
下地 幾代<sup>2)</sup> 松村 泰志<sup>2)</sup>

株式会社エムケイエス<sup>1)</sup> 大阪大学医学部附属病院医療情報部<sup>2)</sup>

### The future of Healthcare Information Technologist and Health Information Manager

Manabe Shirou<sup>1)</sup> Fujii Ayumi<sup>2)</sup> Murata Taizo<sup>2)</sup> Horishima Hiroyuki<sup>2)</sup>  
Ueda Kanayo<sup>2)</sup> Shimoji Ikuyo<sup>2)</sup> Matsumura Yasushi<sup>2)</sup>

MKS Co., Ltd.<sup>1)</sup> Department of Medical Information Science, Osaka University Hospital<sup>2)</sup>

The main job specification of a Healthcare Information Technologist (HcIT) is the utilization of information processing technology. In all occupations related to health welfare, ability in using the computer is a necessity. In the future an efficient HcIT will also require knowledge of corporate strategy. Therefore they will need to have the ability to build a medical information system that can make good use of various types of information. Chief Information Officers (CIO) will be selected from the group of senior HcITs.

Recently, the main hospital information system is moving away from an order entry system to an electronic chart system. Using the order entry system, radiologists, pharmacists and laboratory technicians, etc can make database master tables. However, using the electronic chart system, doctors and nurses need to analyze data and make database master tables from the medical chart. Here is a lot to do, so the Health Information Manager (HIM) should perform this task. In addition, HIM needs to audit the medical chart and use the medical record database for various purposes. He will also need the ability to utilize information processing technology. Therefore, it is expected that he will acquire the qualifications of the HcIT.

HIM is usually in direct contact with the doctor and the nurse. On the other hand, HcIT is like the overall manager. They will each show their ability.

#### Keywords:

#### 1. はじめに

近年、病院などの医療機関において、「情報」を扱う医療情報技師や診療情報管理士といった資格を持つ人が増えてきている。ここでは、医療情報技師について紹介し、診療情報管理士との違いや、今後、それらの資格をどのように考えるべきかについて述べる。

#### 2. 医療情報技師

医療情報技師は日本医療情報学会が認定する資格として2003年に第1回試験が行われ、2010年までに述べ8,080人が認定され、「保健医療福祉専門職の一員として、医療の特質をふまえ、最適な情報処理技術にもとづき、医療情報を安全かつ有効に活用・提供することができる知識・技術および資質を有する者」として定義されている。そして、具体例として保健医療情報システムの企画・開発・運用・管理・保守など、情報処理技術を活用できる技術者が挙げられており、情報技術のみならず、診療に関する内容を含む保健医療などについての幅広い知識が要求されている<sup>1)</sup>。

医療情報技師は、受験に際して特に資格制限を設けていないため、誰でも受験することが可能である。また、その資格の特性から、受験しているのは医師や看護師、臨床検査技師などの医療系スタッフだけではなく、電子カルテを開発・販売している企業関係者、教職員、事務職員など多岐にわたる。元々、この資格は医療機関で働く職員よりも企業関係者の認定者数が

多く、病院などの医療機関では、当初は医療情報システムの運営を専門に担当する者よりも、医療従事者が資格を取得していた。

#### 3. 上級医療情報技師

上級医療情報技師は医療情報技師の上級資格として2007年に第1回試験が行われ、現在までに140名が認定され、「医療情報部門管理者を補佐し、医療情報システムに関する専門的観点から、システム運用と企画開発を担う」人材であると定義されている。

上級医療情報技師の認定者の勤務先・業務内容の分布は一般には公開されていないが、受験申込者の分布は公開されている。それによると、全体の約70%が企業からの受験者で占められている<sup>1)</sup>。医療機関で働く医療情報技師は他の医療資格と兼務しているケースが多く、上級医療情報技師は受験資格として5年以上の実務経験が必要であり、試験の内容は医療情報システムに関する深い知識が求められるため、企業勤務の医療情報技師に比べて受験者数が少ないと考えられる。

近年、医療機関では組織運営などを戦略的に行うために、その情報を扱い、企画・開発ができる部署として医療情報部門が注目されるようになってきている。そこでは、医療経営、プロジェクトマネジメント、IT戦略策定、サービスマネジメントなどの知識が求められ、上級医療情報技師を中心に、それらを学習するための

プロジェクトも立ち上がっている<sup>2)</sup>。今後、そのような知識をベースに実績を積み上げていくと、上級医療情報技師の中からは病院の情報管理を統括するような病院CIO(chief information officer;最高情報責任者)としての立場を目指す者が現れると思われる。

#### 4. 診療情報管理士

診療情報管理士は日本病院会が1972年より診療録管理士として通信教育による養成を始め、1996年より資格名称を診療情報管理士に変更し、2010年までに28,000名の有資格者を生み出している<sup>3)</sup>。

主な業務内容として、診療録の物理的な管理や内容の精査を行う「物の管理」、診療情報をコーディングするなどしてデータベースを構築する「情報の管理」、構築されたデータベースから必要な情報を抽出・加工・分析する「情報の活用」がある<sup>4)</sup>。

#### 5. 診療情報管理士の今後

近年、病院情報システムの主役はオーダエントリーシステムから電子カルテシステムへ移りつつある。オーダエントリーシステムでは、伝票の流れを分析・システム化することで対応できたため、その分析作業・マスタ作成作業は該当する部門内で完結していた。しかし、電子カルテシステムになると、診療記録の分析・システム化が必要となり、それらの業務は診療録について熟知している診療情報管理士の力が必要になる。また、診療録の監査や診療情報として登録されたデータベースからのデータ抽出など、診療録に密接に係わる部分でも診療情報管理士の力は必要とされる。このように、診療情報管理士に対しても情報処理技術を活用する能力が求められるようになるのは間違いない。

そのため、診療情報管理士に対する教育内容にも変革が求められる。例えば、コードを検索する方法にしても、辞書のような分厚い本から検索するよりもコンピュータを使って検索する仕組みを利用すれば、時間も手間も短縮することが可能になる。ただし、そのようなシステムを使う際には、臨床検査技師が自動分析機を扱う際に、その検査原理を知って機器を扱うのと同じことで、その検索結果に間違いがないかどうかを検出するためにも、ある程度はシステムが持っている検索する理論や方法についての知識を持たなくてはならない。

また、診療情報が全て電子化されると、診療録の監査なども全てシステムを利用することで可能となる。そうすると、診療情報をどのように利用できるように設計するのには使う側の意識にかかってくる。システムの機能だけではなく、運用の部分も含めてトータルで考

える能力が必要となるだろう。パッケージで提供される電子カルテシステムについては、使える情報が限定されるかもしれないが、その場合は、足りない情報を市販のデータベースを用いることでカバーするなどの方法を検討しなければならない。これらは、上級医療情報技師の領域であると考えられるが、より実地的な運用を考えるにあたっては、現場のことを知っている診療情報管理士の力が必要になると思われる。

#### 6. まとめ

診療情報管理士の資格をとるためには、専門の学校に通わなくても通信教育で資格を取得することが可能である。資格をとるための勉強をする過程で、今まで業務を通してなんとなくしかわからなかった診療録に関する知識が、どういう目的でどのように活用されるのかがわかるようになってくる。そのように診療録に関する知識を高めることで、その医療施設で使われる医療情報システムで本当に必要とされている情報には、どのようなものがあり、足りない場合はどのように運用でカバーすればよいのか、などが見えてくるだろう。そのために、できることならば、医療機関で働く医療情報技師は診療情報管理士の資格をとることが望ましいと考える。

逆に診療情報管理士で、電子カルテといった医療情報システムの取り扱いを医療情報を担当する人の役割と考える人もいるかもしれない。しかし、紙で診療録を管理する時代から電子化された情報を管理する時代になり、その管理する手法は情報処理技術についての知識がなくては、難しいものになってきている。また、電子化されて大量のデータを扱うことができるようになり、それらを解析することも今後は診療情報管理士の重要な仕事内容の一つになってくると思われる。そのためにも、医療情報技師の資格にチャレンジし、情報処理技術や医療情報システムに対する知識を増やしてゆくことが望まれる。

同じ医療情報を扱うことになっても、診療情報管理士は現場に近いところで、医療情報技師は全体を統括するような形で、それぞれの力量を発揮することになるだろう。

#### 参考文献

- [1] 医療情報技師育成部会.[http://www.jami.jp/hcit/HCIT\\_SITES/index.php](http://www.jami.jp/hcit/HCIT_SITES/index.php).
- [2] 医療情報マネジメント知識体系講習会.<http://www.kcgh.gr.jp/~hi/khit/himbok/index.html>.
- [3] 日本病院会.<http://www.jha-e.com/top/abouts/license>.
- [4] wikipedia"診療情報管理士".<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%A8%BA%E7%99%82%E6%83%85%E5%A0%B1%E7%AE%A1%E7%90%86%E5%A3%AB>.